The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	古墳時代における埴輪様式と王権
Author(s)	東影, 悠
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/96172
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　東影　悠　）	
論文題名	古墳時代における埴輪様式と王権

論文内容の要旨

本論文は、日本の国家形成期に位置づけられる古墳時代（３世紀中頃～６世紀）を対象とし、時代を特徴づける古墳の中でもその装置の一つである埴輪を研究の中心に据え、王権中枢で創出された「埴輪様式」の展開過程と地域波及の実態を分析することで、王権による葬送儀礼の執行と管理が国家形成の中で果たした役割を明らかにすることを目的とする。埴輪の配置・配列は、古墳時代を通じて古墳上において展開し、王権中枢から日本列島各地にもたらされた。それは古墳の装置の一つとしての側面とともに埴輪を用いた他界観あるいは葬送観念の表象が古墳時代を通じて重視されたからと考えられる。本論文では埴輪の製作技術とともに埴輪の器種組成や配列といった様式構造に注目し、様式構造が王権中枢でどのように発展したのかを解明するとともに、王権中枢から各地への展開も分析することで、古墳の主要素の一つである埴輪の地域波及の実態を論じる。

古墳時代に関する考古学的研究においては、古墳の埋葬施設や副葬品など古墳に関わる各種要素の分析にもとづいて、その時代の特質が語られてきた。しかしながら、発掘調査の有無あるいは盗掘などによる遺物の有無などによって各古墳の諸要素の発現には不均衡が生じる場合があること、副葬品などの器物には「伝世」など古墳そのものとの年代的齟齬が生じる場合があることなども事実である。一方、埴輪は、発掘調査によらない表面採集等でも資料が確保され普遍的にその様相が分かること、基本的には古墳の築造に伴って生産されたものであり「伝世」等の古墳と器物の年代差を考慮しなくてもよいことなど、資料の豊富さと古墳との同時代性といった点でより王権中枢と地域の関係をより正確かつ具体的に捉えることが可能となる。

そこで本論文では、①王権中枢で生産された「王陵系埴輪」の様式の実態を解明し、その変遷の画期と意義を明らかにすること、②「非王陵系埴輪」の様式を検討し、「王陵系埴輪」との影響関係の強弱から王権中枢と地域の関係の実態を明らかにすること、③王権中枢と地方との関係を焦点に古墳秩序と権力構造の実態を明らかにすること、の三つの目的に沿って各部・章の分析を行った。本論文はⅡ部構成とし、序章、第Ⅰ部（第１～７章）、第Ⅱ部（第８～11章）、終章、の全13章となる。このうち、上記目的の①を第Ⅰ部、②を第Ⅱ部、③を終章においてそれぞれ論じた。

序章では、本論文の学史上の意義を明らかにするため、埴輪生産に関する研究史を総括し、既往の研究にみられる課題を指摘するとともに、本論文における指針を明確化した。特に本論文の主要概念となる「埴輪様式」について定義を行い、以下の論の前提とした。

第Ⅰ部では「王陵系埴輪」の生産と様式に焦点を当て、まず第１章では、古墳時代開始期の墳墓の諸要素を検討し、その成立過程について考察した。その結果、古墳時代前期の古墳の諸要素の展開については１～４期の４つに区分でき、古墳の定型化には前期を通じて段階的な変遷があったことを明らかにした。そして、「前方後円墳体制」と呼称される古墳時代を特徴づける墳墓秩序は、王権中枢において４期に完成することを示した。

第２章では、古墳時代前期の埴輪様式の王権中枢における画期と変質を検討した。特にオオヤマト古墳群での墳墓の出現過程と埴輪様式の変質・器財埴輪の出現過程を分析し、オオヤマト古墳群において「前期後葉埴輪様式」が萌芽し、それが佐紀古墳群へと継承されたことを明らかにした。特に、器財埴輪がオオヤマト古墳群において第１章で示した４期に定型化することは、古墳の諸要素と墳墓秩序の完成とも一致する現象であり、この時期に古墳築造に関わる大きな画期が認められた。また、オオヤマト古墳群から佐紀古墳群への王権の移動に伴って副葬品の刷新が認められるのに対し、器財埴輪がほぼそのまま継承された点からは、古墳という可視的装置が示す伝統性の重要さという意義を明らかにした。

第３章では、「中期前半埴輪様式」が古市古墳群・百舌鳥古墳群の成立に先立って和泉地域で萌芽し、それがオオヤマト古墳群で採用された「前期後葉埴輪様式」と統合されて古市古墳群・百舌鳥古墳群へ導入されたことを明らかにした。こうした前段階の埴輪様式を踏襲して大型古墳群の移動とともに「中期前半埴輪様式」が成立するこ

とは、第２章で明らかにした前期後葉の様相と同じであり、古墳とその外表施設である埴輪には、前代からの伝統性を表象するという意義が時代を経ても変わらず重視されたことを示した。

第４章では、佐紀古墳群の大型前方後円墳における周庭帯の埴輪配列の復元から、王権中枢の大王墓の埴輪配列との比較を通じ、王権中枢部の埴輪配列の特質を明らかにした。その結果、大王墓から埴輪配列に関する規範が畿内一円で共有された可能性が高いことを示すとともに「中期後半埴輪様式」の特質を示した。

第５章では、古墳時代後期の埴輪生産の特質を論じ、これまで十分に検討されてこなかった後期の円筒埴輪の系統を分析するとともに、王権中枢における「王陵系」・「非王陵系」を含む横断的な円筒埴輪編年を構築した。後期の円筒埴輪については、製作技術の特徴の変遷とともに製作技術の粗雑化に伴って突帯間隔のばらつきが大きくなることを標準偏差によって客観的数値として区分することが有効であることを示した。

第６章では、中期から後期へという時代の推移とともに埴輪製作技術も変質し、あわせて円筒埴輪の突帯数と器高によって示される規格も変質したことを示した。さらに、円筒埴輪の規格と古墳秩序の相関性を分析し、円筒埴輪の規格が古墳秩序と関連する大和・河内、古墳秩序と関連せずに統一された規格の円筒埴輪が用いられる淀川流域周辺という対比構造として把握できることを明らかにした。また、そうした規格に関する地域的規範が、円筒埴輪の製作技術の差異を超えて認められることから、製作者集団によって規格が規定されたのではなく、各地域の古墳秩序あるいは規範に合わせて生産されたものであると位置付けた。

第７章では、形象埴輪の製作技術を分析し、後期前葉に画期が認められること、畿内の南半と北半で製作技術の分布に差異が認められることを示した。後期には、基本的な製作技術は共通しているものの、形態や細部の技術に関しては形象・円筒埴輪ともに地域性が認められるようになる。王陵系埴輪の「後期前半埴輪様式」については、大枠での共通性を保有しながらも地域性が発現することに特徴があり、このことから埴輪製作者集団の自律的な戦略の選択があったこと、製作者集団の組織的柔軟性が増して組織としての成熟が進んだことを読み解いた。

第Ⅰ部と対比させるために、第Ⅱ部では「非王陵系埴輪」の生産と様式に焦点を当てた。まず、第８章では、畿内内部に王陵系埴輪とは異なる系統の須恵器系埴輪が中期末から各地で出現し、後期前葉には畿内に広く展開することを指摘した。本章では、特に尾張系埴輪の生産動向に焦点を当て、製作技術や胎土の特徴からそれらが尾張から畿内に製作者が移動して生産されたものであることを示すとともに、尾張からの製作者の移動を伴うことからその背景に畿内と尾張の首長層同士の結びつきを読み取った。

第９章では、畿内におけるもう一つの須恵器系埴輪である大和南部型埴輪を分析の対象とした。当初は王陵系埴輪の製作者との分業により技術的難易度の低い円筒埴輪を製作していた大和南部型埴輪製作者が、時期を経るごとに難易度の高い形象埴輪をも製作するようになったことを示した。そして、畿内において須恵器系埴輪が出現した背景として、中期の埴輪生産を主体的に行っていた王陵系埴輪の生産体制の変質が関わっていたことを明らかにした。また、須恵器系埴輪についても王陵系埴輪と同様に円筒埴輪の規格が古墳秩序と相関することを指摘し、非王陵系埴輪である須恵器系埴輪も畿内の生産秩序の中に位置付けられていたことを示した。

第10章では、王権周縁部における埴輪生産の展開とその意義を論じた。王権から最も離れて古墳の築造された東北に展開する埴輪の製作技術的系統を分析し、畿内、東海、関東にそれぞれ系譜を有する埴輪がモザイク状に展開することを指摘した。東北では、他地域とは異なり地域独自の埴輪が展開せず、そのほとんどが他地域に系譜を有するものとなることが地域的特徴である。

第11章では、東北・関東の埴輪生産遺跡を分析の対象とし、その生産・供給類型の時期的変遷と画期を論じた。その結果、東北でも王権中枢で認められるような拠点継続的生産が認められること、関東では埴輪窯の導入当初から一元的な広域供給が認められることを明らかにした。また、王権中枢の埴輪様式との比較を通じて、王権中枢から東北への埴輪様式の展開過程を検討したが、その多くが基本的には関東を経由して伝えらえており、王権中枢を志向しながらもその系譜は関東に由来するという、王権中枢と周縁部の重層的関係の実態を明らかにした。

終章では、11章までの分析を元に、古墳時代の展開の中で埴輪生産と埴輪様式がどのように変遷し展開したのかを総括するとともに、埴輪生産からみた古墳秩序と権力構造について論じた。特に王権の主導勢力が移動する際に王権中枢では前代の埴輪様式を継承しようとする志向が強く、そこから可視的装置である古墳を通じて王権の正統性を表象しようとする王権の意図を読み取った。一方、地域での埴輪生産は、王権中枢の様式を志向しながらもその生産の特徴は地域によって異なり、その画期も王権中枢とは整合しない。王権中枢においては造墓コンプレックスの中で埴輪生産が行われたが、埴輪生産と様式の特徴から王権の権力構造モデルとして「積み上げ型」と「輻輳型」の二つを示した。中期までは「積み上げ型」であったものが、後期には「輻輳型」へと変遷し、文献史学が指摘する「大王に代わる大夫層による奉仕集団の管理」という王権の支配システムの変化と時期・仕組みともに合致する点は重要であり、まさに国家形成へと向かう組織の在り方を具体的に示すことを明らかにした。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　東影　悠　）	
論文審査担当者	（職）　氏　名 主 査　大阪大学　教授　福永　伸哉 副 査　大阪大学　教授　高橋　照彦 副 査　大阪大学　教授　市　大樹

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　古墳時代における埴輪様式と王権

学位申請者　東影　悠

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　福永　伸哉

副査　大阪大学教授　高橋　照彦

副査　大阪大学教授　市　大樹

【論文内容の要旨】

本論文は、古墳時代の王権中枢で創出された「埴輪様式」の展開過程とその地域波及の実態を分析し、王権による葬送儀礼の執行と管理が国家形成過程で果たした役割を明らかにするものである。全体は、７章からなる第Ⅰ部、４章からなる第Ⅱ部に序章と終章を加えた構成で、分量は 400 字詰原稿用紙換算 658 枚、図 147 点、表 23 点である。

序章では、埴輪研究の学史を総括し、本論文における課題と方法を明示するとともに、埴輪の様相を把握する際の分析概念とした「埴輪様式」について定義を行った。

これに続く第Ⅰ部では、王陵に用いられた埴輪とその技術系統下にある畿内地域の埴輪を「王陵系埴輪」と呼称して、その生産や使用の局面に焦点を当て、時系列に沿って詳細な検討を行った。まず第１章で古墳時代の時期区分を整理した後に、第２章～第７章では、おもに王権中枢の古墳出土資料から把握した「埴輪様式」を通時的に提示する。まず古墳時代前期では、奈良盆地東南部のオオヤマト古墳群において創出された「前期後葉埴輪様式」が盆地北部の佐紀古墳群へと継承されたこと、中期には、和泉地域で萌芽した「中期前半埴輪様式」が「前期後葉埴輪様式」と統合されて古市古墳群・百舌鳥古墳群へ導入され、広く普及したとの理解を示した。このように前段階の埴輪様式の一部を踏襲して次の様式が成立する特徴から、古墳に用いられた埴輪には前代からの伝統性を表象する意義があったと評価した。また、中期後半には王権中枢の埴輪配置の規範が畿内一円で共有された可能性が高いことを指摘し、これを「中期後半埴輪様式」の特質ととらえた。

後期については、円筒埴輪の突帯数や器高の違いが古墳の階層秩序に対応する大和・河内に対して、統一規格の埴輪が用いられる淀川流域周辺というように、畿内地域内部でも在り方が異なる点に注目し、形象埴輪の特徴を加味して「後期前半埴輪様式」を提示した。そして、大枠での共通性を持ちながらも地域性が発現する当該期の特徴から、製作者集団が自律的な生産戦略を持つ程度に組織的柔軟性を増したことを指摘した。

第Ⅱ部では、王陵に供給されたものとは異なる特徴を持つ埴輪を「非王陵系埴輪」と呼称して、その生産と様式の在り方を検討した。第８章～第９章では、須恵器製作技術との関係が推定される尾張系埴輪と大和南部型埴輪が後期の畿内地域で広まる現象を重視し、中期までの埴輪生産を主体的に担った王陵系埴輪の生産体制が後期に至って変質した状況を読み取った。とくに尾張系埴輪については、尾張から畿内に参入した工人が製作に関与

したことを推定し、その背景に継体大王期の畿内と尾張の首長層の密接な関係を想定した。

第 10 章～第 11 章では、王権中枢域との比較を行う観点から、東北・関東地方の埴輪生産について検討した。東北では、地域独自の埴輪が展開せず、王権中枢の様式を志向しながらも実際の製作系譜は関東に由来する実態を明らかにし、埴輪の波及・受容における王権中枢と周縁部の重層的関係を浮き彫りにした。

以上の分析を踏まえて終章では、「埴輪様式」の推移の全体像を提示するとともに、埴輪は葬送儀礼の可視的装置である古墳を通じて王権の正統性を表象する役割を有していたと総括した。そして、埴輪の生産と様式から見た古墳時代王権の権力構造モデルとして、地域首長が統括する各地域が大王のもとにそれぞれ縦系列でつながる「積み上げ型」と、各地域の特定の役割と職掌を有する集団を大王周辺の統括者が束ねる「輻輳型」の二つを示し、中期までの「積み上げ型」から後期には「輻輳型」に転ずるととらえて、これを国家形成過程における大きな変化と意義づけた。

【論文審査の結果の要旨】

古墳の表面から多量に出土する埴輪類は、かつては本格的な考察対象とされることさえ少なかったが、近年その編年や製作技術に関する研究が大きく進み、膨大な成果が蓄積されるに至っている。本論文は、そうした研究の激戦区に挑み、大王墓の所在する畿内地域と王権周縁の東日本出土資料の精緻な観察・分析に基づいて、墳墓築造の一部をなす埴輪の製作・使用の実態と推移を明らかにするとともに、埴輪を用いる葬送儀礼を創出・管理した古墳時代王権の特質にまで説き及んだ意欲作である。

本論文の積極面としてまずあげられるのは、埴輪の形態、製作技術、器種組成、配置方式などを総体的にとらえて「埴輪様式」として類型化し、様式の変遷過程を軸に古墳時代埴輪の全体像を把握した独創的なアプローチである。また、前後の様式間に一定の継続関係を認めて、前代からの伝統の継承が王権の正統性を示す意義を持っていたと評価した点も示唆に富む。さらに、「王陵系埴輪」と「非王陵系埴輪」双方の分析から、中期と後期の様式の在り方が大きく異なることを見いだし、これを王権による地域把握の質的な転換と関連付けて理解した見解は、器物としての埴輪研究を超える高次の視野を有している。

このように評価できる本論文ではあるが、改善を要する点も認められる。考察で用いられた「埴輪様式」は分析概念として一定の有効性を持つ一方で、各様式の構成要素の選択にばらつきが見られたり、埴輪が出現する前期前半の様式的理解が示されていないなど、理論面・適用面でなお深化させるべき余地を残している。また、多くの研究がある墳丘・埋葬施設・副葬品などとの比較検討がやや不足している感も否めない。叙述に関しては、いくつかの章で内容に部分的な重なりが見受けられ、論文構成の体系性を減じる一因となっているのが惜しまれるところである。

とはいえ、膨大な資料の粘り強い観察・分析によって埴輪の全体像と意義を的確にとらえ、葬送儀礼への関与を通じて王権の地域把握が進展する過程を実証的に提示した本論文は、古墳時代研究における最先端の到達点を示すものと評価できる。よって、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。